参考書誌研究・第30号(1985・9)

近代韓国公共図書館史の研究

—開化期から1920年代まで—

宇治郷　毅

はじめに
I　開化期の図書館事情
1　朝鮮人による図書館設立運動の開始
(1)紳士遊覧団による日本の図書館紹介
(2)兪吉濬の図書館論
(3)大韓図書館
(4)大同書観，その他
2　日本人による図書館設立運動の開始
(1)佐藤寛の図書館論
(2)釜山図書館
(3)山口精と京城図書館
II　日帝治下，武断政治期の図書館事情
1　日本人(団体)による私立図書館設立
2　李範昇の図書館設立運動とその思想
(1)　李範昇の図書館設立運動の開始
(2)　李範昇の図書館思想
III　文化政治期，とくに1920年代の図書館事情
1　官公立図書館の設立
(1)朝鮮総督府図書館
(2)満鉄京城図書館
(3)公立図書館の設立
2　朝鮮人による図書館設立
(1)郷校財産による図書館
(2)朝鮮人個人による私立図書館
(3)京城図書館
おわりに

はじめに

本稿は，近代韓国における公共図書館の歩みをたどりながら，その歴史的特質と意義を明らかにしようとするものである。

対象とする時期は，李朝末，開化期から，日本統治下のいわゆる「文化政治」期前半にあたる1920年代末までである。このうち，1920年代は近代韓国公共図書館史上一つのピークをなす時期なので，本稿でも紙数をとって詳述した。

ところで，近代韓国における公共図書館史は，他のあらゆる歴史的分野と同じく，日本の植民地支配によって大きく影響をうけた。一方で，朝鮮人による独自の図書館運動が展開されたが，同時に日本人居留民による図書館運動も存在した。とくに1910年の日韓併合以後は，朝鮮総督府の植民地主義的教育政策によっ

て複雑な図書館事情をていした。すなわち朝鮮人独自による図書館運動と，日本人及び日本統治当局による図書館運動が相互に影響し，反発し合い，また融合するという状況が生まれた。したがって本稿では，朝鮮人による図書館運動と日本人による図書館運動を並列して述べてはいるが，その間の交流関係にも大きな注意をはらった。

本稿は1960年代以降の韓国の図書館学と歴史学の研究成果に多く負っている。特に白麟(ペクリン)，李鴻求(イホング)，朴熙永(パクヒヨン)，安春根(アンチュンゲン)諸氏の従来の図書館史研究に負うところが大きい。また金抱玉(キムポオク)，權恩璟(クオンウンギョン)氏ら若手研究者の最近の業績も参考にした。さらに，1970年代に入って出版され始めた各個別の図書館史，なかでも『国立中央図書館史』(1973年)，『鍾路図書館六十年史』(1980年)，『南山図書館六十年史』(1982年）を主に参考にした。

なお本稿では，国名表記については韓国としたが，地域名，人名表記については当時の用法に従い朝鮮，朝鮮人とした。

I　開化期の図書館事情

韓国における近代化の歩みは，李朝末期1876年の日本との江華島条約締結に始まる。韓国はひき続きアメリカ，イギリス，ロシアなど欧米諸国に開国を迫られ，いやおうなく開化，近代化への努力をしいられた。国内においては開国に反対する保守派と近代化を進めんとする開化派の闘争が激化したが，李朝政府は1881年政府高官から成る紳士遊覧団を日本へ派遣したり，1883年には遣米使節団をアメリカに派遣したりして，欧米及び日本などの先進諸国を視察せしめた。また1884年以降は留学生を派遣して，積極的に欧米の近代思想，科学技術，諸制度の導入に努力した。実際の国内改革においても，1884年の甲申政変をへて，1895年の甲午改革によって政治，経済，社会，文化の各方面にわたる近代化を推進した。文化教育面では，従来の書堂と同時に近代的な学校が設立され，出版業と書店が生まれた。西洋式の活版印刷機が導入され，『漢城旬報』や『独立新聞』などの有名な新聞，雑誌が発行され，しだいに近代的公共図書館が生まれる条件がととのっていった。

韓国における開化期の図書館事情としては，欧米の近代公共図書館の紹介と，実際の図書館設立運動があげられる。韓国における近代公共図書館思想，制度の導入は，明治初期の日本と同じく，海外視察者，留学生の見聞，外国図書からの翻訳によってなされた。紳士遊覧団による見聞記や兪吉濬による西洋図書館紹介はその典型的事例であった。ただ日本の場合は，いわゆる御雇外国人による建言によって明治期の図書館設立が進められた側面があったが，韓国においてはそのような条件はなかった。けだし韓国においては，近代国家として成立をみない間に，日本によって半植民地化されたからであった。

実際の図書館設立の面では，大韓図書館や大同書観など朝鮮人独自による画期的な図書館設立運動が存在した。しかし，これらの運動は，文盲が圧倒的に大多数を占め，いまだ市民社会の形成が未成熟であった当時の社会状況の下では，多くの困難がともなった。加うるに，日本の植民地政策によって大きな制約をうけざ

るを得なかった。

一方，朝鮮人による図書館設立運動が開始される以前に，すでに日本人居留民による図書館の設立が見られた。釜山図書館がその例であるが，これら日本人による図書館運動は狭い日本人社会の中に限られ，いまだ韓国社会全体に大きな影響を与えるまでには至らなかった。

1．朝鮮人による図書館設立運動の開始

(1) 紳士遊覧団による日本の図書館紹介

朝鮮の高宗・閔氏政権は日本との国交をすすめるため第一次修信使金綺秀（キムキス），第二次修信使金弘集（キムホンジップ）を派遣した。金弘集は1880年8月，東京の湯島聖堂内にあった孔子廟を参拝するため東京図書館を訪問した(1)。当時日本の国立図書館たる東京図書館（帝国図書館の前身）はこの聖堂大成殿内に設置されていたからである。これは記録に残る朝鮮人の日本の公共図書館参観の最初であると思われる。

さらに1881年4月，朝鮮政府は，明治維新後の日本の実情を詳しく調査するため，政府高官から成る総勢62名の一大視察団を日本に派遣した。これがいわゆる紳士遊覧団であるが，彼らは文明開化した当時の日本の文物制度を視察し，帰国後高宗に『聞見事件』及び『日本聞見事件草』なる報告書を提出した。文部省関係の調査には趙準永（チョジュンヨン）があたり，その報告書に『日本文部省視察記』（1881年）がある。彼らは1881年6月，東京図書館を視察したが，『東京図書館明治十四年報』には「三十日朝鮮国ノ承旨閔種黙参議洪英植等三十余人来リ館内ヲ覧観ス」と記録されている。また趙準永はその時の印象を，『日本聞見事件草』（第二輯，1881年）の中で，次のように述べている。

「……孔廟妥安塑像殿額以大成初門題以仰高次門曰入徳正門曰杏壇左廡有四書五経百家子書設卓蔵貯猶有尊経之儀至於右廡各国書之雑置見甚不敬太学称以図書館是白斉。……」

この東京図書館についての見聞報告は，韓国における近代公共図書館紹介の最も初期のものと思われる。

(2) 兪吉濬の図書館論

李朝末期の開化派政治家であり，啓蒙家であった兪吉濬（ユキルジュン）（1856-1914）は，紳士遊覧団の一員として渡日し，福沢諭吉の知遇をえた。彼は福沢から大きな影響をうけ，福沢の『西洋事情』（1867年）を参考にしながら，1895年4月『西遊見聞』なる本を刊行した。これは韓国最初の本格的な西洋紹介書であった。

この本の中で彼は，「書籍庫」の名で西欧市民社会の公共図書館を初めて紹介した。

「書籍庫は政府の設立したものと，政府と人民の合作で建設したものがあり，経書，史記，各学問分野の書籍から古今の名画，小説，各国の新聞に至るまで備わらざるものはない。外国の書籍は新しく出版されたら購入し，本国の書籍は出版した者が各地書籍庫に各一冊を送布する故に，書籍の蔵書数は日をおって増加する。このように書籍を貯蓄するのは，世の中に無識の人民を無くすることを欲する一大主意からである。泰西諸国では大都会で書籍庫のないところはなく，いか

なる人であっても書籍を閲覧したい者は書籍庫に任意に入り，どんな本でも見ることが許される。しかし帯出することは許されず，ただ勉学する学徒が書物がなくて学ぶことができない場合に限り，借料を払って借り出すことができる。もしその書物を毀傷した場合は，代価を弁償する。各国の書籍庫で最も有名なものはイギリスの首都ロンドンにあるものと，ロシアの首都ペテルスブルグにあるもの，そしてフランスの首都パリにあるものである。その中でもパリの書籍庫が最も大きく，その蔵書数は200万冊をこえ，フランス人は常にその規模の宏大なることを誇っている(2)。」

ここには，近代公共図書館の諸機能がほぼ正確に把握されている。それは福沢諭吉が『西洋事情』の中で「文庫」として紹介した図書館の内容と大体同じであった。しかし，兪吉濬の図書館機能論の中には，福沢の「文庫」の中に見いだされない一つの重要な指摘があった。それは図書館の目的にかかわることだが，彼は「世の中に無識な人民をなくする」ために図書館が存在すると述べている点である。これは彼が，図書館というものを学校教育の単なる補完物としてではなく，社会教育機関としての独自の役割を認めていたことを示している。この点について，啓明実業専門大学講師權恩璟は兪吉濬の図書館像を次のように要約し，高く評価したのである。

「(兪吉濬は) 図書館の機能を学術研究のためではなく，無知な国民をなくするためのものとして紹介している。韓国の開化の緊急性と，惨憺たる経済的貧困・教育事情に起因する文盲を退治する機関として図書館のイメージを集中させたのである。(3)」

このように，やっと近代化への端緒についたばかりの開化期韓国において，兪吉濬による新しい図書館像が導入された意義は大きかったと言えよう。

(3) 大韓図書館

大韓図書館は，韓国の秀れた図書館史研究家白麟氏によって“韓国最初の国立図書館”として紹介され，世に知られるようになった。しかし，この図書館については資料が乏しく，あまり詳しいことはわかっていない。白麟氏も，当時の新聞である『皇城新聞』(ソウル，皇城新聞社) に載った若干の記事によって，この図書館を紹介しているにすぎない(4)。ここでも，その研究成果にたよらざるをえないが，この図書館が朝鮮人による最初の民族的な図書館設立運動であったことは確かである。

この図書館は1906年2月，当時の韓国の首都京城で李範九(イボムク)，李根湘(イクンサン)，朴鏞和(パクヨンファ)など民間の有志達によって，「韓国図書館」の名で設立計画された。同年3月，名称を「大韓図書館」と改め，政府高官の賛同を得て役員を決定した。図書館長に度支部大臣閔泳綺(ミンヨンギ)，評議員長に宮内部大臣李載克(イジェクク)，書籍委員長に学部大臣李完用(イワンヨン)，その他評議員に閔商鎬(ミンサンホ)，尹致昊(ユンチホ)など25名が選出された。そして，図書館建設と経営に必要な資金は館長以下役員が共同で負担することに決定した。蔵書は有志による寄贈と，李王家宮廷文庫の一部をひきついで構成した。その中には歴代国王の系譜等の王室関係資料，歴史書を中心とした漢籍，日本で発刊された新刊書が含まれていた。当時，この図書館がいか

に熱烈に朝野をあげて歓迎されたかは，『皇城新聞』の「賀図書館之設立」（1906年2月15日）などの記事によく現れている。

しかし，この図書館の実際の運営は困難をきわめたようで，1909年4月には宮内部の所管となった。図書館も宗親府という宮廷の建物内に移された。今まで有志達による私立図書館として運営されてきた大韓図書館も，この時点で官立図書館的性格を強くもつに至った。しかしこの図書館は，近代的意味における国立図書館とはその実態があまりにへだたっていた。館名に国名（当時は大韓帝国）を使い，設立者に多くの政府要人をあて，建物と蔵書を王室に依拠したとは言え，公共性という観点からみるとき，この図書館はあまりにも閉鎖的であった。『皇城新聞』の1910年3月22日付記事「図書館竣功」の中に，「宮内部に移管した図書館を現在拡張しているが，この工事が終了ししだい古今書籍を多数陳列して一般紳士に観覧させる予定である」とあり，一般公開が一応考えられていたようであるが，日韓併合によって挫折してしまった。そして併合後の1911年5月，蔵書は朝鮮総督府取調局に没収され，大韓図書館は廃止されてしまった。大韓図書館はいわば“未完の国立図書館”であったと言えよう。

(4) 大同書観，その他

1906年3月，平壌に設立された「大同書観」は朝鮮人によって実際に公開され，経営された韓国最初の私立図書館であった。金大潤（キム テユン），秦文玉（チンムンオク），郭龍舜（コアクヨンスン），金興淵（キムフンヨン）の4人の連名で公表された「大同書観趣旨書」（『皇城新聞』1906年4月9日）には，次のように述べられている。

「……ここに我々は，意をそそいで書籍と新聞の縦覧所を創設し，その位置は平壌府鍾路に定め，名称は大同書観とし，本邦の書籍から世界各国の各種書籍類までできうるかぎり購入せんとするものである。……また希望によっては縦覧と購読に一々応ずるはずであるからご照会されたい。」

かくして，開館された大同書観は新刊書籍1万冊あまりを備え，一週間の貸出図書数が数千冊に達するほどの活況を呈した。1906年2月の統監府の設置によって日本による植民地化が急速に進んでいた状況の中で，“民智の開発と文化の前進に寄与せん”(5)とした設立者の意図と世界の新知識を求める民衆の願望がみごとに一致した画期的な図書館事業であった。しかし，この可能性をはらんだ民衆図書館も，日韓併合によって閉館の運命をたどらざるを得なかった。

またこの大同書観以外にも，当時のソウルには「書籍縦覧所(6)」や「同志文芸館(7)」という私立公共図書館運動が存在したが，大きな発展をみないうちに挫折してしまった。

2. 日本人による図書館設立運動の開始

(1) 佐藤寛の図書館論

韓国の義親王宮顧問であった佐藤寛(8)は「韓国図書館設立の議(9)」という論文の中で，韓国における緊要の事業として次の三つのことを提唱した。それは，(1)貴族教育の機関としての学校を設立する

こと，(2)文献採蒐の機関として図書館を設立すること，(3)知識開発の機関として博物館を設立すること，であった。そして図書館設立について，具体的に次のような提案をした。

「今の日本は，朝鮮を保護国としたれば，政治，法律，文学，技芸，一切の師表たるべきは云ふまでもなく，新古の図書，亦保護せざるべからず。……若し夫れ奎章閣にして旧慣を打破し，其の秘蔵を発して，一大図書館を創立し，勅令を以て，各道観察府，及び各地書院の所蔵を調査し，其の図書館に無きものは取って之を補ひ，且つ旁く求め，博く捜るべし。……」

これは統監府のリーダーシップによって，奎章閣（李朝王室文庫の一つ）など旧来の蔵書を中心に図書館を設立しようとするもので，一種の国立図書館設立論であった。それは前述の「大韓図書館」が朝鮮人による国立図書館設立運動であったのに比べ，あまりにも露骨な植民地主義的国立図書館設立論であった。このような論調は，後の朝鮮総督府の官立図書館論に継承されていくものであったが，ともかくも佐藤寛のこの図書館論は韓国の図書館に関する言及としては，日本人として最初のものであった。

(2)　釜山図書館

釜山図書館は1901年10月，道徳運動団体であった日本弘道会釜山支部によって設立された。初め「弘道図書館(10)」と称したが，1903年11月に「釜山図書館(11)」と改称したもので，主として日本人居留民のための文化教育機関としての役割を担っていた。設立当初は図書6千冊と若干の新聞雑誌を備えていたが，しだいに規模を拡大した。1910年12月には釜山教育会に移管され，さらに1919年4月には釜山府に移管され，「釜山府立図書館(12)」となった。

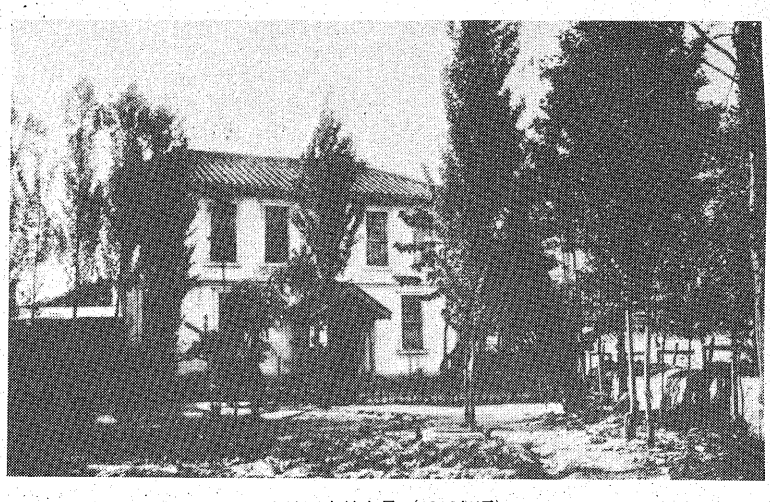
この図書館は現在「釜山直轄市立市民図書館」として継承されており，韓国図書館史上では最も古い近代公共図書館として位置づけられている。また，日本図書館史の立場から見ると，釜山図書館は日本人が海外において設立した図書館の中では，台湾文庫（台北，1901年1月設立）についで最も古い図書館であった。

(3)　山口精と京城図書館

京城図書館は1908年9月，「京城文庫」の名で，京城寿町の日本人商業会議所内に，商業会議所書記長山口精(13)によって設立された。翌1909年2月開館し，一般公衆に無料で公開したが，書庫，閲覧室が狭隘となったため，1911年8月南米倉町に新築移転し，「京城図書館」と改称した。京城図書館は1919年，経営難によって閉館されるまで，山口個人の私財をもって運営された私立図書館であり，当時の朝鮮では最大規模の図書館であった。日韓併合前，日本人によって朝鮮で設立された図書館としては釜山図書館，江景文庫(14)，木浦図書倶楽部(15)と京城文庫の4館があったが，純然たる個人図書館はこの京城図書館ただ一つであった。

京城図書館は次の4点で，韓国図書館史上重要な意義をもっていると考えられる。

第一は，この図書館が創立当初から参考図書館的性格をもっていた点である。山口精自身も『京城図書館概況』の中で，



京城図書館全景（1916年頃）

「産業及ビ商工業調査ノ便ニ供スル目的ヲ以テ創設セリ(16)」と述べているとおりである。

第二は，この図書館は当時最大の蔵書数を有し，蔵書内容も充実していた点である。1919年の閉館時，蔵書数は1万6千冊に達し，参考図書類，官庁資料などの非市販資料を多数所蔵していた。

第三は，1920年11月，その蔵書の大部分が尹益善らが設立した「京城図書館」（翠雲亭図書館）に継承された点である。そしてその蔵書の一部（新刊書）が，現在のソウル特別市立鍾路図書館の蔵書として引き継がれていることである。

第四は，実際の図書館活動もかなり活発であった点である。『京城図書館概況』（京城図書館，1916年）の1915年度統計によると，開館日数は年303日，入館者数5,420人，閲覧冊数20,637冊に達している。利用者のうち8割が日本人，2割が朝鮮人であった。また，この図書館は1912年に『京城図書館図書月報』という広報誌を発行しているが，これは朝鮮における日本人による最初の図書館報でもあった。

II　日帝治下，武断政治期の図書館事情

1910年8月の日韓併合以後，1919年までは徹底した憲兵警察制度がしかれ，いわゆる武断政治が行なわれた。あらゆる民族運動が抑圧され，言論，出版，集会，結社の自由が剥奪された。教育面でも，1911年制定された「朝鮮教育令」第2条で，「教育に関する勅語の趣旨に基き忠良なる国民を育成することを本義とする」と規定され，朝鮮人に対する皇国臣民化政策がとられた。学校教育でも，朝鮮人に対しては日本語教育を中心とした初等教育と，植民地統治に抵触しない実業教育が中心となった。またこの時期，朝鮮総督府はいまだ社会教育に着手する余裕がなく，図書館政策も不毛のままであった。

この時期の図書館事情について特徴的なことは，朝鮮各地において日本人（団体）による公共図書館設立が盛んであったことだ。しかし，これらは狭い日本人居留民社会の利益を反映した私立図書館運動にすぎなかった。ただこれらの運動を歴史的に見れば，これらの図書館が後に公立図書館に発展し，現在の韓国図書館の淵源の一つになったことも確かである。その反面，この時期は併合前に大きな高揚をみせた朝鮮人による図書館運動がすべて消滅してしまった。この時期，朝鮮人による実際の図書館設立は１館もなかったのである。ただこの朝鮮人による図書館運動の冬の時代に，李範昇による図書館設立運動が開始された事実は注目すべきことであった。

1．日本人（団体）による私立図書館設立

『朝鮮総督府統計年報　大正８年度』（朝鮮総督府編）の「図書館状況調査」によると，この時期日本人によって設立された公共図書館としては，第一に日本人個人によるもの，第二に学校組合によるもの，第三に教育会によるもの，第四に宗教団体によるものがあった。

この時期新たに個人によって設立された図書館としては，順天図書館（全羅南道順天郡，1911年９月，樋口正毅），大田図書館（忠清南道大田郡，1913年７月，久門雄二），天安文庫（忠清南道天安郡，1914年12月，田尻満），霊岩文庫（全羅南道霊岩郡，1915年11月，最上豊太），光州図書館（全羅南道光州郡，1919年４月，大塚忠衛），金次郎文庫（慶尚南道馬山府，1919年６月，堀田孫之）があった。

学校組合によって設立された図書館としては，清津図書館（咸鏡北道清津府，1913年４月，清津学校組合），安城公立小学校附属図書館（京畿道安城郡，1913年５月，安城学校組合），開城公立小学校附属図書館（京畿道開城郡，1915年10月，開城学校組合）があった。この学校組合は，1909年の「学校組合令」（統監府発布）によりつくられた公共団体であったため，これら図書館も公立図書館的性格をもっていた。

教育会によって設立された図書館としては，平安南道教育会図書閲覧室（平壌府、1913年３月，平安南道教育会），群山教育会図書館（全羅北道群山府，1914年７月，群山教育会），金提教育会図書館（全羅北道金提郡，1915年３月，金提教育会），全州図書館（全羅北道全州郡，1915年12月，全州教育会）があった。この教育会は学校教育を補佐し，各種の社会教育を行なうため，当時各地に生まれた団体であった。社会教育の一つとして，図書館事業にも意をそそいだ。たとえば群山教育会では，「図書館の経営，講演会及び講習会の開催，学童寄宿舎の経営，育英部の設立(17)」をその事業内容としてうたっていた。

宗教団体によって設立された図書館としては，仁川基督教青年会による仁川文庫（仁川府，1911年４月）があった。

ところで，日本人によって設立されたこれら図書館は，現在の韓国ではどのような評価をうけているであろうか。ここでは代表的と思われる清州大学校講師金抱玉の見解をとりあげておこう。

「この地に移住して来た日本人たちは，主に農工商業に従事していた労働者階層であって，どんな学問的知識も専門的技

術ももたずにやって来た人達であった。したがって図書館の設立は，一次的には彼らの教養，教育のために必要なものであったが，すすんでは植民地政策の効果を促進するための資料センターとして活用することにあった。⑱」

2. 李範昇の図書館設立運動とその思想

(1) 李範昇の図書館設立運動の開始

朝鮮人による図書館運動がほとんど封殺されていた武断政治期に，李範昇(イボンスン)⑲(1887～1976)による図書館設立運動が存在したことは特筆大書すべきことであった。

李範昇は1912年，京都帝国大学に留学し，法制史研究を続けていたが，祖国に同族の手になる図書館が存在しないことに心を痛め，朝鮮における図書館事業に挺身する決心をした。大学院在学中の1918年初め上京，当時の日本図書館協会会長和田萬吉に面会し，図書館経営についてひろく意見を求めた。そのとき日本図書館協会は，李範昇の朝鮮における図書館事業に対する熱意に深い感銘をうけたようで，次のように記している。

「京都帝国大学出身の法学士李範昇氏は故国朝鮮に図書館の殆ど皆無なるを慨き，近き将来に於いて私立通俗図書館建設の企面を立て，其準備として此程本会長和田萬吉氏を訪ひ，種々質疑する所ありたり。氏が此計画は洵に奇特と謂ふべく，該事業の成功を祈ること甚だ切なり。本会は特に同氏に『図書館小識』一部を贈りて参考の資とせられんことを望めり。⑳」

また彼は，日本各地の図書館の調査研究に意をそそいだが，特に東京市立日比谷図書館からは多くのことを学んだようである。

さらに李範昇はこの頃より，文筆を通して朝鮮における図書館の必要性を訴える活動を開始した。その代表的なものは，『京城日報』に4回にわたって連載した「図書館を設立せよ―王世子御慶事の記念として―㉑」であった。この文章は当時の彼の図書館思想を知る上で貴重な文章であった。

実際の図書館設立のためにも，彼は活動した。たとえば1918年春，渋沢栄一男爵と児玉秀雄伯爵に面会し，「図書館の必要が朝鮮に於て最も急なる㉒」ことを具申したが協力を得られなかったこと，また翌年，大連の満鉄勤務時に，泰東日報社長金子雪斎などの協力で図書館設立を企てたが失敗したのがその例である。しかし，この時期の彼の運動は日本人の要人や有志者に働きかけて実現させようとするもので，おのずから限界があった。真に彼の運動が実を結ぶのは，独力で「京城図書館」を設立する1921年9月を待たねばならなかった。

(2) 李範昇の図書館思想

当時の李範昇の図書館思想は，前述の「図書館を設立せよ―王世子御慶事の記念として―」と，それに引き続いて発表された「児童教養と母の修養」(『京城日報』1918年5月26日)，「母の改良㈠～㈤」(『京城日報』1918年5月28日～6月1日)，「京城図書館と私」(『京城彙報』11号臨時号，1922年10月)，「農民教育の第一歩，農閑期を利用して諺文を教へよ」

(『朝鮮社会事業』3巻11号，1925年12月)などによって知ることができる。

彼の図書館思想は，当時の欧米及び日本の先進的図書館思想を吸収しながら，あくまで朝鮮の現実をふまえたものであった。それは一つには近代公共図書館思想の実践化であり，もう一つには図書館を通して，文盲が圧倒的多数を占める農民層及び社会からとり残されている児童と婦人を啓蒙，教育せんとする先駆的な解放思想であった。

李範昇の図書館思想は，アメリカの図書館学者ダーナ（John Cotton Dana[23]）などの影響をうけており，図書館独自の社会的機能を強調するものであった。彼は，学校と新聞と図書館が社会教育に必須のものであることを指摘し，続けて図書館の必要性を特に強調して次のように述べている。

「然るに半島の何処へも未だ図書館有るを聞かざるは誠にかなしむべき事では御座いますまいか。小生の如きものは寧ろ図書館設立の急を叫ぶもので御座います。目下半島の情況は悠然として普く学校の教育をのみ待つ暇が御座いません。図書館を公開致して学校の新教育を得受けざりしものへは勿論，得受けしものへも盛に新智識を媒介致すべき必要が御座います。[24]」

さらに彼は，近代公共図書館の必要性とその社会的効果を次のように述べた。

「市民をして図書館の供給する図書を究読講学せしめ理想的大学に学ばしむるのみならず，各種の職業に一大裨益を与へ，政治及び経済的行動に対する穏健なる主義を普及し，且一般公衆に智的修練の材料を附与し，其趣味を涵養せしめて高尚純正ならしむるものなり。[25]」

ところで，彼の図書館思想のきわだった特徴は，植民統治下の朝鮮で文化的に最も疎外されていた農民，児童，女性を図書館の対象として重視した点である。

全人口の8割を占め，大部分が文盲であった農民に対しては，農閑期を利用したハングル講座を提唱している。これは村単位で，普通学校卒業生を教師にして農民にハングルを教え，「雑誌新聞を読める程度[26]」にすることを目標にした。同時に，各郡，各道で巡回文庫と巡回講話を行ない，一般民衆に「一般的知識を普及せしめ以て自覚せしめ，時代を知らしめ，自から立たしめ，厄介者ならざる程度まで進ませる[27]」ことをめざすものだった。

児童については，図書館の附属事業として児童図書館を設け，教育を行なわんとした。彼は児童図書館を「児童教養所」とも呼んでいるが，これは「児童嗜好の書籍を自由に閲覧せしめ，かつ目を楽ますべき種々美麗なる絵画，娯楽機関及びその他の復習室等の設備を完備し，以て児童を喜ばしむる[28]」ものであるという。このような児童図書館の思想は韓国図書館史上初めてのものであり，現在から見てもその先駆的意義は失なわれていない。

また彼は，封建制度と儒教の下で苦しんでいる婦人の解放を追求した。特に社会，道徳，慣習の三重桎梏の下にある「母の改良」ということを重視した。彼は，「母の改良により社会は改良せられる[29]」とまで言いきっている。そのためには彼女達が教養を身につけることが最も大事であると考え，その方法として「通俗講演講話」「無料幻燈」「活動写真」などを通して「素養知識を与えて其の不完全な処を漸次改良せしめたい[30]」と述べてい

る。

以上述べた児童，婦人に対する彼の思想は，後年実際の図書館活動の中ですべて実践化されることになった。

III　文化政治期，とくに1920年代の図書館事情

1919年3月に起こった三・一独立運動は，日本の植民地支配に大打撃をあたえた。日本は植民地政策の転換を迫られ，同年8月新朝鮮総督に斎藤実を任命し，それまでの武断政治をいわゆる「文化改治」に改めた。それは日本の植民地支配に抵触しない範囲内において，一定の政治的，社会的自由を朝鮮人に与えようとするものであった。いわば制限つきの文治主義，より巧妙化した同化主義政策の開始であった。

韓国図書館史の側面からみるとき，この時期は朝鮮総督府が社会教育行政の重要さに気づき，図書館政策に初めて着手した時期でもあった。総督府は内務局に社会課を設置（1921年7月）し，図書館行政の元締とするとともに，1923年11月韓国最初の官立図書館たる朝鮮総督府図書館を創立した。また同時に，朝鮮各地に多くの公立図書館を設立し，朝鮮における図書館網の整備を図った。1922年度からは道地方費による「社会教化事業」として，「図書館竝村落巡回文庫の設置(31)」をうたい，図書館を「社会教化」政策の一環にくみ込もうとした。

一方この時期は，朝鮮人による民族運動，労農運動，文化運動が澎湃として起こった。とくに教育面においては，朝鮮人による初めての民立大学設立運動が起こったし，図書館設立運動もめざましいものがあった。郷校財産による図書館設立と，朝鮮人個人による公共図書館設立が顕著であった。その中でも，尹益善，李範昇らによる「京城図書館」の設立は，近代韓国図書館史上の一大ピークをなす運動であった。

1.　官公立図書館の設立

(1)　朝鮮総督府図書館

朝鮮総督府図書館は1922年2月，「朝鮮新教育令」発布記念事業の一つとして計画され，1923年11月の「朝鮮総督府図書館官制」の公布をもって創立された。実際の開館は，1925年4月であった。

この図書館が設立された表むきの理由は，朝鮮における中央図書館として「文化政治」の一翼を担わせることにあったが，より本質的には植民地政策遂行のための資料提供機関，及び植民地民衆を慰撫，教化するための社会教育機関として機能させることにあった。このことは，総督府自らが「図書館ハ社会教育上最モ重要ナル機関(32)」であり，朝鮮総督府図書館の使命が「民衆の教化」にあると述べていることによって明らかである。

開館直後に発行された『朝鮮総督府図書館要覧　大正十四年七月現在』(朝鮮総督府刊）には，この図書館の基本的経営方針が次のように記されている。

「本館ノ理想ハ国立図書館ノ使命ヲ果スニアリ，即チ新古ノ精選セラレタル参考図書ヲ聚積シテ廣ク利用ノ方法ヲ講ジ実益趣味人格ノ向上ヲ計ルヲ以テ第一義トス，朝鮮民族ノ文献ハ素ヨリ朝鮮ニ関スル和漢洋書ヲ蒐集シテ朝鮮研究者ノ参

考資料トスルヲ以テ第二義トス，全鮮ニ図書館ノ普及発達ヲ計リテ其ノ中心機関トナリ又公私ノ学校図書館或ハ諸団体ト連絡提携シテ社会教育ノ成果ヲ挙グルヲ以テ第三義トス。」

この図書館は開館当時，職員19名，蔵書数2万8千冊，収容人員数304席（中央，特別，婦人，新聞，家族の各閲覧室）ほどの中規模図書館であったが，その後大衆文庫，婦女子文庫などを開室し，漸次機能を拡大した。職員数が最大に達した1942年には職員95名，蔵書も解放時28万冊を数え，文字どおり朝鮮における国立中央図書館として図書館界に君臨した。

この図書館について最も注目されるのは，その意欲的な書誌活動と対外活動であった。館報『文献報国』（1935年10月創刊）の発行，朝鮮読書連盟の機関誌『読書』及び朝鮮図書館研究会の機関誌『朝鮮之図書館』の編纂発行は，朝鮮図書館界の理論的水準の向上と活性化に大きな役割を果した。また1931年からは巡回文庫を通して地方図書館を援助したり，「朝鮮図書館講習会」開催に協力し，朝鮮における図書館教育の向上に貢献した。1935年からは「朝鮮総督府図書館事業会」を組織し，各種の社会教育事業を推進した。

この図書館は解放直後「国立図書館」と改称されたが，1963年の図書館法の制定により「国立中央図書館」となり，名実共に韓国の中央図書館として今日に至っている。

(2) 満鉄京城図書館

この図書館は1920年7月，南満洲鉄道株式会社により「満鉄京城図書館」の名で龍山の地に設立された。「満鉄京城図書館規則」の第1条に，「本館ハ通俗図書ヲ蒐集シ主トシテ南満洲鉄道株式会社京城鉄道局勤務ノ社員及其家族ノ修養ニ資シ併セテ一般公衆ノ閲覧ニ供スルヲ目的トス(33)」とあるごとく，主として満鉄職員に奉仕することを目的としていた。満鉄は1910年以来，大連，奉天，長春など中国東北地方の主要都市に大図書館を設立していったが，1924年末にはその数は22館に達した。このうち大連，奉天は参考図書館として，他は公共図書館の性格をおびていた。このような満鉄による図書館網の整備は，日本の大陸政策遂行に奉仕する資料提供機関の確立をめざすものであった。

満鉄京城図書館は1925年4月，朝鮮総督府鉄道局の管轄となり，「鉄道図書館」と改称され官営化された。この図書館は巡回文庫を初め多彩な活動を展開し(34)，朝鮮総督府図書館とともに植民地下朝鮮の二大官立図書館の一つとして発展した。1943年12月，「交通図書館」と改称され，1945年には蔵書数16万冊に達していた。

解放後は朝鮮戦争で多くの貴重な資料を失なったが，1961年に「交通部公務員教育院図書室」となり現在に至っている。

(3) 公立図書館の設立

1920年代以降，公立図書館は飛躍的に増加した。全図書館の中に占める比重も年々増大し，1930年代以降私立図書館が減少傾向をしめしたのに比べ，質量ともに朝鮮における図書館の中心となっていった。公立図書館には道，郡，府，邑などによって設立されたものがあったが，

中心は府立図書館であった。このような公立図書館の積極的建設の意図は，当時勃興してきた朝鮮人による図書館運動に対抗しようとするものであったし，また上からそれらを取り込んでしまおうとするものであったと考えられる。

日帝治下最高の図書館数に達した1932年度の統計によると(35)，全図書館52館のうち公立は17館であった。その内訳は道立１館（全羅北道），府立13館（京城，京城府立鍾路分館，仁川，群山，木浦，大邱，釜山，馬山，平壌，鎮南浦，咸興，清津，元山），邑立３館（清州，光州，海州）であった。これらのうち，予算規模，施設，蔵書，職員数などの点で最大のものは，1922年７月創立の京城府立図書館（現ソウル特別市立南山図書館）であった。

ところで，この当時設立された公立図書館は現在の韓国図書館界の基礎的部分を形成しているが，現在の韓国ではどのように評価されているのであろうか。公立図書館の中で主導的役割を果した京城府立図書館を例にとって見てみよう。

「1919年の３・１独立運動というわが民族の大蜂起に狼狽した日帝は，偽装した文化政策の産物としてわが館の前身である京城府立図書館を作ったが，それは彼らの植民地人教化という統治目的のための道具の一つであった。しかし，そのような目的を逆利用した民族の知恵は，この図書館を民族の力量を育てる道場として活用したのであった……(36)」

2．朝鮮人による図書館設立

(1) 郷校財産による図書館

1920年代以降，朝鮮人によって設立された図書館のうち，その大部分は郷校財産によるものであった。1935年までに31館設立されているが，1922年から1929年までの間にその大部分の24館が設立されている。

ところで郷校は高麗，李朝期を通じ，地方の公立教育機関として発展してきたもので，主に教育と文廟釈奠に従事していた。しかし1920年６月の「郷校財産管理規則」の制定によって，郷校所有の郷校田（学田）からの収入は文廟維持と社会教化事業にのみ使用しなくてはならないとされた。これにより，各地の郷校は図書館経営にのりだしたが，その大部分は“簡易図書館”とか“新聞図書閲覧所”と呼ばれる極めて規模の小さいものであった。蔵書数も千冊未満のものが多く，利用者もごく限られていた。

しかし，この郷校財産による図書館は朝鮮人（主に儒学者）によって運営され，地方の教育機関が少なかった当時において，地方文化向上の一翼をになった点で意義が大きかった。主に郡部に設立されたため，図書館の地方への普及に一定の役割を果した。

(2) 朝鮮人個人による私立図書館

1920年代に入り，少数ではあるが朝鮮人個人による私立公共図書館が生まれた。これは武断政治期抑圧されていた朝鮮人の文化的，社会的要求の現れであった。数は少なかったとはいえ，民族的自覚をもった先覚者達によって設立され，民族の啓蒙に大きな役割を果した。

主なものとしては，尹益善，李範昇らによって設立された京城図書館（1920

年)，孫永穆(ソンヨンモク)による蔚山簡易図書館(1923年，のち蔚山郡郷校財産に移管)，姜偉情(カンイチョン)による鎮南浦図書館（1924年，のち府に移管)，劉勲栄(ユウフンヨン)による御成婚記念海州図書館（1925年，初め海州面と共同経営，のち海州邑立となる)，金仁貞(キムインジョン)女史による仁貞図書館（1931年）などがあった。このうち平壌に設立された仁貞図書館は比較的規模も大きく，1945年の解放時まで継続維持された数少ない図書館の一つであった。その他はすべて財政難によって廃館ないし公立化された。これは植民統治下の朝鮮で，朝鮮人独自による図書館運動がいかに困難であったかを示している。しかしその中で京城図書館は，1926年京城府に移管される前，近代韓国公共図書館史上独自の民族的図書館活動を展開し，その後の図書館運動に大きな影響をあたえた。次に若干の考察を試みてみよう。

(3) 京城図書館

1) 尹益善らによる京城（翠雲亭）図書館の創立

(イ) 設立者たち

京城図書館は1920年11月5日，尹益善(ユンイクソン)，尹亮求(ユンヤングー)，金章煥(キムチャンファン)らによって，京城府嘉会洞の朝鮮貴族会所有の翠雲亭内に設立された。館長に金允植(キムユンシク)，館監に尹益善(イ)，李斌承(ブスン)，館司に尹亮求，金章煥，金麗鶴(キムヨハク)が任命された(37)。

この図書館は三・一独立運動以後，朝鮮人によって設立された最初の私立公共図書館であった。この図書館設立に際しては，上記の人達以外にも当時の朝鮮各界各層の有志の協力があった。とくに同月27日の開館式には来賓三百名，学生数千が参集し，大部分の者が「館友」になったという(38)。このことは，この図書館が当時いかに多くの大衆の期待をになって誕生したかを示している。この図書館の後身である現ソウル特別市立鍾路図書館は，京城図書館が「単純な図書館としての必要性だけでなく，民族運動の基地として設立された(39)」として，その民族主義的性格を強調している。またこの図書館の民族主義的性格は，設立者のうち館長金允植と実質的な経営者尹益善が共に有名な民族主義者であったことでも知られる。

金允植（1835～1922）は，李朝末期の開化派政治家，著名な文学者。金弘集内閣の外務大臣をつとめ，日韓併合に際して朝鮮総督府中枢院副議長となり子爵を授けられた。しかし，三・一独立運動に加担し，爵位を剝奪され，幽閉された民族主義者であった。

尹益善（1872～未詳）は，普成専門学校（現高麗大学校）を卒業し，韓国陸軍に奉職していたが，1911年から母校の校長となった。校長在職中の1919年3月，三・一独立運動に直面し，「朝鮮独立新聞」なる地下新聞を発行し，逮捕，投獄された。獄中で，民族啓蒙のための図書館計画をたて，出獄2ケ月後に京城図書館を設立した。その後，中国間島に東興中学校を設立したり，ソウルで社会教化事業に従事したりして，一生を社会教育のために尽した民族主義者であった。

(ロ) 設立動機

彼らの図書館設立の動機は，開館式で発表された「設立状況報告」の中によく現れている。

「局部的生活の時代をへて世界的社会生活をする時代になったが，もし世界的な研究と世界的知識がないならば一個人の家庭生活も完全に営むことができない。このような時にあたり，わが朝鮮民族の学問と知識界を観察すれば，寒心にたえない境遇にある。もしわが民族に哲理的研究と世界的知識を修得させようとすれば，各々の先人賢哲の遺説を参考にせざるを得ない。われわれの経済力で，十分な書籍を準備できるかどうか難問ではあるが，しかし1ケ所に図書を集めて頭脳明敏な人士たちに閲読させることは，知識の発展，学者の養成上便利であると認められる故に，ここに本館の経営を始めんとするものである。(40)」

ここには，朝鮮民族発展のために“知識の発展”と“学者の養成”が必要であるという思想が強くでているが，これは朝鮮人のための高等教育が制限されていた当時の植民地朝鮮における図書館の役割とその意義を深く認識していた結果であったと考えられる。

(ハ) 山口精の「京城図書館」との関係

この図書館設立については，従来，山口精が南米倉町で経営していた「京城図書館」を“引き受けたもの”とか“再建したもの”という見方があった(41)。それは両者が館名が同じであったこと，尹益善らが山口精経営の図書館蔵書の大部分を継承した点からくる誤解であった。しかし，この両者はまったく別個の図書館であったと考えられる。なぜなら，蔵書は山口精から経営を委任されていた橋本茂雄，松本正寛らから買収したものであった(42)。またより重要なことは，この両図書館の間に思想面での何らの継承関係がなかったことである。つまり，山口精等と尹益善等との間に図書館経営について引継の合意が認められないからである。あくまで翠雲亭の京城図書館は，朝鮮人によって独自に設立された図書館であったと言えよう。

(ニ) 運　営

蔵書は前述の山口精経営の京城図書館から購入したものと，朝鮮内外の有志からの寄贈による1万5千冊ほどであった(43)。これは，当時の朝鮮で最大の蔵書数であった。

施設は閲覧室と書庫を備えていた。のちに婦人閲覧者の増加にともない婦人図書室を設置しているが，当時の朝鮮人婦人の読書熱の高まりとそれに対応したこの図書館の深い配慮を知ることができる。

閲覧は無料であった。図書館は盛況を呈していたようで，当時の新聞には「最近，京城図書館には毎日婦人読者がやってくる。……日ごとに本を見に来る人がふえて，現在の図書室では収容がむつかしい時もある。(44)」と報じられているほどであった。

維持費用は，主として尹益善，金章煥，尹亮求の私財にたよっていたため，財政基盤は薄弱であった。「館友会」の会費もあったが，図書館財政の安定化を図るにはいたらなかった。かくして，京城図書館は1年後には早くも経営難に陥った。

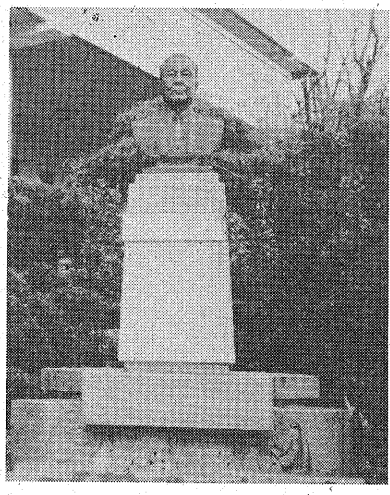
2) 李範昇による京城（鍾路）図書館の経営

(イ) 新図書館の設立

尹益善らの図書館が経営難に直面して

いた時，別個に李範昇による図書館設立が計画され，この二つの図書館が合併するに至った。

李範昇は日本滞在時からの宿願であった図書館を，1921年9月10日，京城府鍾路二街のパゴダ公園横に設立した。この場所は旧韓国軍楽隊が使用していたところで，当時朝鮮総督府の所管となっていたが，無料で借りうけることができた。当初，「臨時新聞雑誌閲覧所」の看板をかかげ設立準備を進めていたが，正規に開館したのは翌年1922年1月6日のことであった。この時李範昇は尹益善と協議し，両図書館を合併することに合意した。そして鍾路の図書館を「京城図書館本館」とし，翠雲亭の図書館を「京城図書館分館」とすることに決定した(45)。かくしてこの日は，李範昇にとっては朝鮮民族のための図書館設立という宿願が達成された日であり，また同時に近代韓国図書館史上からみれば，尹益善と李範昇という二人の偉大な図書館人が堅く手を結びあった記念すべき日となった。



鍾路図書館前庭の李範昇先生銅像

ところでこの時，本館と分館との間で一定の役割分担がなされた。本館は一般大衆を対象に新刊図書，雑誌，新聞を配備し，分館は学者及び漢文の読める閲覧者を対象に漢籍を整備することになった。

このような京城図書館の設立は，近代韓国図書館史上初めての一大図書館運動の開幕であったし，その後の朝鮮人による図書館運動のモデルとなった。のみならず，これは日本人による図書館運動にも大きな影響を与えた。特に当局をして，京城府立図書館と朝鮮総督府図書館の設立を急がせる一つの要因となった。

(ロ) 運　　営

図書館の組織は館長以下，事務員2人，媒母1人，出納手6人，小使2人の計12人であった。媒母は児童室担当であった。出納手は正出納手（昼間の担当）3人と学生から採用した夜間担当出納手3人から成っていた。

建物は旧韓国軍楽隊の宿舎を代用していたが，1923年7月新館を建築した。この費用は徽文義塾設立者閔泳徽（ミンヨンフイ）の寄附によった。建物は2階建，130余坪の石造で，閲覧室(90人収容)，出納室，新聞室，特別室，休憩室，事務室及び書庫が備わっていた。この新館は，韓国における近代図書館建築の最初のものであった。元の旧館には児童室(80人収容)，休憩室，事務室が設けられた。

蔵書は創立以来しだいに増加し，1923年8月の新館開館直後には，新刊図書7,200冊，古書2,300冊，雑誌110余種，新聞50種に達した。ところで，翠雲亭にあった京城図書館分館は1923年7月31日に閉館したが，この時蔵書約1万冊が尹益善

によって中国間島に移された(46)。

利用状況については，京城図書館の最盛期であった1923年度を例にとって見ると，全入館者数は70,606人で，1日平均人数は257人であった。その内訳は成人男子60,338人，成人女子200人，児童10,070人であった。このうち日本人利用者は，全体の5％強の4,040人にすぎなかった。また利用者を職業別にみると，全体の75％を学生が占め，次に無職者が15％，残りの10％を農工商業従事者，官公史，軍人，銀行，会社員，記者，教員，宣教師，徒弟，職工が占めていた。このように京城図書館は，開館以来各界各層の多くの人々によって利用されたが，その盛況の一端をうかがわせる冬期の閲覧状況を李範昇は次のように記している。

「厳寒ニモ係ラズ，十時開館前既ニ三，四百人門外ニテ長蛇ヲナシ開館ヲ待ツガ如キ状況ナリシモ，約半数ノミヲ収容スルニ過キズ(47)。」

京城図書館は財政面で当初から大きな問題をもっていた。それは毎年の収入の半分以上を李範昇個人の負担にたよっていたことと，支出の3分の1が銀行利子の返済にあてられていたことである。朝鮮人有志の寄付もあり，また朝鮮総督府，京城府の補助もあったが，大部分を寄付にたよらざるを得ないという不安定さを常に避けられなかった。入館料（1日1回2銭，1ケ月定期閲覧料40銭）も徴収したが，全収入の10分の1にも満たなかった。また李範昇は，経営の安定化のため財団法人設立も企画したが実現しなかった。

(ハ) 附帯事業

京城図書館は本来の閲覧業務だけでなく，当時考えられる可能なかぎりの附帯事業を行なった。特に児童，婦人のための文化的，教育的諸事業には先駆的なものが多かった。これは李範昇にとっては，彼の児童観，女性観に基づいた長年の構想の実践化であった。また韓国公共図書館史の上から見れば，このような図書館の文化センター的機能は今日の韓国公共図書館がめざす方向を先取りしたものであったと考えられる。

児童のために，次の諸事業が行なわれた。

〈児童館の設立〉　李範昇は京城図書館構内に木造瓦家の児童館を設立した。これは韓国最初の児童図書館でもあった(48)。1923年9月，80名収容可能の児童閲覧室を設け，児童書650冊を配架した。閲覧室は小学校の授業時間を配慮して，午後のみ開室された。

〈視聴覚資料の配備〉　児童館には標本，掛図，絵画，理化学器具を置き，実験と解説により児童の知識向上を図った。また月1回以上の「幻燈・活動写真会」及び「レコード・コンサート」を開催し，児童に慰安をあたえた。

〈童話会の開催〉　毎日曜日夜に童話会を開き，一般児童に必要なる童話を読み聞かせた。講師には，当時有名な児童文学者方定煥（バンチョンファン），丁洪教（チョンホンギョ）などが招かれた(49)。

〈貧民児童のための補習教育〉　学校に行けない児童30余名を集め，2ケ年卒業の予定で日本語，朝鮮語，算術などを教えた。講師には朝鮮女子教育会の会員があたった。

〈少年クラブの結成〉　1925年3月から，児童の教導機関として「現代少年倶楽部」を組織し，青少年運動にのりだした。

なお，この他に構想されていて実現しなかったものとして，「伽劇」（児童劇）の上演と児童遊園地の設立があった(50)。特に児童遊園地は児童の体育向上の観点から作ろうとしたものであったが，もし実現していれば京城最初のものとなったであろう。

婦人のためには，次の事業が行なわれた。

〈夜学部の設置〉　児童閲覧室を夜間開放し，朝鮮女子青年会の会員を教師に学校をでていない旧家庭の婦人達に新教育を施した。1924年度の『事業報告』によれば，学級数5，学習人員数60名に達した。

〈婦人講座の開催〉　毎週土曜日夜に婦人講座を設け，婦人に必要な学術，衛生，家事などの講話をしたり，実習をした。また，家事，衛生などで必要なものは謄写版刷りのパンフレットを作成，配布した。1924年度の参加者は，3,700人（開催回数40回）に達した。

〈映画会などの開催〉　月1回以上，映画及び音楽鑑賞会を開催した。また，京城府内の普通学校校庭を借りて，「夏期巡回婦人納涼映画大会」を開催し，家庭婦人に慰安を与え，あわせて教養の向上を図った。

〈見学会の開催〉　朝鮮女子教育会と協力し，朝鮮日報社の後援のもとに婦人見学団を組織し，京城府内の重要機関（商工業作業場，動・植物園など）を参観せしめた。開催回数7回，のべ参加人員は900余名に達した。

(二) 閉　　館

新館開館以来めざましい活動を展開してきた京城図書館も，1924年の後半に入ると経営難が深刻化した。李範昇の必死の努力にもかかわらず，1926年初めには負債額が3万7千円に達し（当時の年間予算は約1万5千円），経営不能におちいった。1924年10月から1925年1月までの臨時休館に続いて，1926年2月には長期休館せざるを得なくなった。

このような京城図書館の窮状に対して，『東亜日報』『朝鮮日報』などの民族紙はしばしば関係記事をのせ，救援のための世論を喚起した。例えば『東亜日報』（1926年3月6日付）は，「朝鮮人から去っていく京城図書館」という記事の中で，「朝鮮唯一の知識庫，5年の功績は今や水の泡。朝鮮はこれ一つも維持できない運命なのか，朝鮮人の中に経営者は現われないのか」と訴えた。また同紙の1926年3月12日付「京城図書館維持運動」なる記事の中では，「尹益善，李範昇氏によって民族的精神に立脚して設立された京城図書館が，日帝の手に渡ろうとする歴史的悲惨な状況となった」と述べ，維持運動の継続をよびかけた。

しかし，短期間ではあったが韓国図書館史に輝かしい足跡を残した京城図書館も，このような多くの人々の努力にもかかわらず，1926年3月25日京城府に移管（京城府立図書館鍾路分館）され，ついにその歴史的幕をとじた。

おわりに

以上，李朝末から1920年代までの韓国公共図書館の発展過程についてその概略を述べたが，資料不足などのため未解明の点が多く残った。今後の研究課題として，以下に指摘しておきたい。

一．開化期における近代公共図書館思想，制度の導入過程の問題。今まで近代韓国公共図書館史は兪吉濬の『西遊見聞』の叙述をもって始められるのが一般的であったが，本稿では紳士遊覧団の東京図書館参観をもって朝鮮人の近代公共図書館接触の最初とみなし，その紹介から始めた。しかし，この時期の導入過程の実態を解明するには，より幅広い資料発掘とより実証的な調査，研究をまたねばならない。

二．個別図書館史の研究。釜山図書館，朝鮮総督府図書館，京城府立図書館，鍾路図書館等の大図書館については独自の館史も出版され研究も進んでいるが，他の中，小図書館については不明の点が多い。とくに，韓国図書館史上重要な位置を占めている大韓図書館と山口精の京城図書館についてはより厳密な研究が必要であろう。また，郷校財産による図書館の設立，廃館経緯，運営実態等についてはより詳しい調査が必要であろう。

三．支配当局による図書館行政上の問題。李氏朝鮮政府，韓国統監府，朝鮮総督府による行政全般及び社会教育と図書館政策との関係の解明が必要であろう。とくに，朝鮮総督府による文化政治期の図書館政策については，より厳密な分析が必要であろう。

四．本稿ではまったく言及できなかったが，この時期の学校図書館と公共図書館との関係，また李朝以前からの文庫（奎章閣など）の変遷史も明らかにされねばならない。

五．図書館経営にたずさわった人物の研究。尹益善，李範昇，山口精など重要な人物についても不明な点が多い。また，韓国図書館史上で名前しか知られていない図書館人も数多い。これら図書館人についての人物研究も残された課題であろう。

なお，本稿では1920年代までの公共図書館史を中心に述べてきたが，1930年代以降の公共図書館史については別稿をもうけて論じてみたいと思う。

（末筆ながら，本稿執筆に際し，資料提供の便宜を図って下さった尚燁（ソウル特別市立正讀図書館閲覧課長），金東済（ソウル特別市立鍾路図書館長），趙滿默（ソウル特別市立南山図書館長），高成玉（釜山直轄市立市民図書館閲覧課長），李澤濬（国立中央図書館閲覧課長），鄭炳浣（韓国放送通信大学図書館長），宋芳燮（韓国国会議事副局長），柳東烈（ソウル大学校図書館収書課長），李弼宰（韓国国会図書館日本駐在官）の諸氏にこの場をかりて心よりお礼申し上げます。）

注

(1) 「東京図書館明治十三年報」（『文部省年報明治十三年』文部省編に収録）に，“八月二十一日朝鮮修信使聖像ヲ拝スル為メニ来館ス”とある。

(2) 兪吉濬『西遊見聞』ソウル，景仁文化社，1969。『兪吉濬全集　第一巻』ソウル，一潮閣，1971。（初版は東京交旬社刊，1895）

(3) 權恩璟「開化期・日帝治下の公共図書館に関する研究〔1〕」『図書館研究』（ソウル，韓国図書館協会）22巻4号；1981，7/8　p.9-10

(4) 『皇城新聞』に載った大韓図書館関係の記事は次のとおりである。「韓国図書館」1906.2.12「賀図書館之設立」1906.2.15「図書館評議会」1906.3.25「史冊運搬」1909.4.6「宗府図書館」1910.2.5「図書館竣功」1910.3.22

(5) 「賀大同書観之設立」『皇城新聞』1906.3.28

2面

(6) 「書籍縦覧所協議」『皇城新聞』1908.9.22 2面

(7) 「同志文芸館」『皇城新聞』1909.9.19 3面

(8) 佐藤寛(1864-1927)は，明治，大正時代の漢学者。伊藤博文の推挙により李王家顧問となり，統監政治に参画した。義親王宮顧問，修学院教授を歴任。

(9) 『朝鮮』(朝鮮雑誌社) 1巻4，5号；1908.6-7に収録。

(10) 「韓国釜山在弘道図書室の新設」『日本弘道叢記』(日本弘道会) 119号；1902.3 p.52～53

(11) 「釜山図書館の設立」『弘道』(日本弘道会) 145号；1904.4 p.35～36

(12) 釜山府立図書館設立以後の館史については，『釜山図書館要覧』(釜山府，1927) と金鍾文編著『釜山市立図書館略史』(釜山，釜山市立図書館，1969) が参考になる。

(13) 山口精(1874-1964)。岐阜県出身。明治42年，京城日本人商業会議所書記長となるが，明治44年以降京城図書館経営に専念す。大正7年以降は実業界に転身す。また昭和4年以降，統営邑長，東莢邑長，蔚山邑長を歴任。『朝鮮産業誌』(上中下三篇，1910-11)『百歳不老秘訣』(1955) など著書多数あり。

(14) 江景文庫は，1907年2月，柴田兼克，坂上富蔵ら日本人6名によって忠清南道江景に設立された私立図書館であった。

(15) 木浦図書倶楽部は1907年7月，高根信礼ら9名によって全羅南道木浦居留地に設立された私立図書館。1928年6月，「木浦府立図書館」となり，現在にいたる。

(16) 山口精『京城図書館概況』京城図書館，1916 p.1

(17) 群山府庁編『群山府史』群山府，1935 p.122

(18) 金抱玉『日帝下の公共図書館に関する研究』ソウル，成均館大学校大学院図書館学科博士論文，1978 p.47

(19) 李範昇(1887～1976)。忠清南道出身。1917年7月，京都帝大法科大学独法科卒業。1917年9月より1919年7月まで，京都帝大大学院在学，法制史及び朝鮮法制史を研究。1918年9月南満洲鉄道株式会社職員となるが，1920年6月退社。1921年9月，京城図書館創立。1923年4月，法学専門学校講師を嘱託される。1926年9月，朝鮮総督府殖産局農務課に勤務するが，1930年離職。解放後の1945年9月，初代ソウル市長となる。国会議員も歴任。1964年，韓国図書館協会から表彰される。1971年9月，ソウル特別市立鍾路図書館前庭に「李範昇先生銅像」が建立された。

(20) 「李法学士の図書館経営準備」『図書館雑誌』34号；1918.3 p.28

(21) 『京城日報』(日本語紙) 1918.5.4，5.21，5.22，5.23。この文章はすぐ，『毎日申報』(朝鮮語紙) 1918.5.17～23に7回にわたって転載された。

(22) 李範昇「京城図書館と私」『京城彙報』11号；1922.10 p.49

(23) John Cotton Dana (1856-1929)。アメリカ，ニュージャージ州の Free Public Library of Newark の図書館長。図書館学者。李範昇はダーナの『A Library Primer』(Chicago, Library Bureau, 1899 p.12) 中の「図書館の社会に与える六種の利益」を引用している。(李範昇「図書館を設立せよ(三)」『京城日報』1918.5.22 1面)

(24) 李範昇「図書館を設立せよ(一)」『京城日報』1918.5.4 1面

(25) 李範昇「図書館を設立せよ(三)」『京城日報』1918.5.22 1面

(26) 李範昇「農民教育の第一歩 農閑期を利用して諺文を教へよ」『朝鮮社会事業』3巻11号；1925.12 p.13

(27) 李範昇「図書館を設立せよ(一)」『京城日報』1918.5.4 1面

(28) 李範昇「児童教養と母の修養」『京城日報』1918.5.26　1面

(29) 李範昇「母の改良(一)」『京城日報』1918.5.28　1面

(30) 李範昇「母の改良(五)」『京城日報』1918.6.1　1面

(31) 『朝鮮社会事業要覧』朝鮮総督府，1924　p.248

(32) 『朝鮮総督府施政年報　大正十四年度』朝鮮総督府，1927　p.165

(33) 『満鉄京城図書館案内』満鉄京城図書館，1923　p.1

(34) 古野健雄「終戦前後の朝鮮鉄道図書館」『図書館雑誌』59巻8号；1965.8　p.49～51

(35) 『朝鮮総督府統計年報　昭和七年度』朝鮮総督府，1934　p.711～712

(36) 『南山図書館六十年史』ソウル，ソウル特別市立南山図書館，1982　p.1

(37) 「寄贈の図書殺到して忙しい京城図書館」『京城日報』1920.12.26　3面

(38) 「開館式場の翠雲亭は当日人山人海に」『毎日申報』ソウル，1920.11.29

(39) 『鍾路図書館六十年史』ソウル，ソウル特別市立鍾路図書館　p.56

(40) 尹益善「京城図書館設立状況」『鍾路図書館六十年史』　p.52

(41) 白麟氏は「京城図書館についての小考」(『南山図書館報』ソウル，ソウル特別市立南山図書館，1973　p.82)の中で，尹益善らによる図書館は“日本人山口精氏が経営していた南米倉町の京城図書館を引き受けたもの”で，“翠雲亭の図書館の前身であると見ることができる”と述べている。また安春根氏は，「韓国図書館史箋註」(『図書館』ソウル，国立中央図書館，30巻9号；1975年10月　p.36)の中で，“前から命脈だけ維持していた日本人設立の京城図書館を尹益善などが引き受けたものではないかと思う。したがって，尹益善は京城図書館の実質的功労者であり，再建者であったと考えることができる”と述べている。

(42) 橋本茂雄は，「行悩んだ図書館」(『京城日報』1919年9月27日）の中で次のように述べている。「自分は松本正寛君と共同で米倉町の京城図書館を前経営者山口氏より引受けたが，自分等には到底之を経営していく資力もなければ時間もない，と云って若し是を山口氏から引受けなかったら全然図書館は滅亡してしまうので是は京城としては実に残念なことなので漸く引受けたのであるが，毎月欠損続きで困っている。自分等の希望としては此際一日も早く府若しくは道の手で京城に一大図書館を設立して貰い度いと思っている。」

この記事から推測できることは，この時点では橋本らは自分達の図書館を府又は道に引継いでもらいたいという希望をもっていたようである。尹益善らへの譲渡問題はこの直後に起こったと推測される。

また，『大阪朝日新聞（朝鮮版）』の1920年12月5日付記事「翠雲亭の図書館―往年の貴族会亭子薬水湧く楊柳の丘―」の中で，尹益善らは750円でその蔵書を買入れたことが明記されている。

(43) 『京城日報』の1920年12月26日付記事「寄贈の図書殺到して忙しい京城図書館」によると，金允植，権重顕など朝鮮人有志の寄贈とともに，朝鮮総督府及び日本の各地の有志からの寄贈があったことが知られる。

(44) 「蔵書三万五千部」『東亜日報』1921.2.25　3面

(45) 李範昇「京城図書館と私」『京城彙報』11号；1922年10月　p.48

(46) 李範昇「大正十二年度業績報告書」京城図書館，1924　この中で，「分館に備置シタル書籍ハ尹益善氏間島ニ持去シ」と述べられているが，その後の蔵書の運命については不明である。

(47) 同上。

(48) 李範昇は児童館と名づけているが，実際は児童図書館であった。当時の新聞も児童図書館と呼んでいる。(「本と留声器を備えた児童図書館は9月1日に開館」『東亜日報』1923.8.31 3面など)

(49) 「京城図書館の童話会」(『東亜日報』1923.11.18 3面) 参照。

(50) 李範昇「京城図書館と私」『京城彙報』11号；1922年10月 p.48～49

参考文献

(単行本)

1. 金鍾文編著『釜山市立図書館略史』 釜山 釜山市立図書館 1969 131p
2. 白麟編『韓国図書館史研究』 ソウル 韓国図書館協会 1969 228p
3. 『国立中央図書館史』 ソウル 国立中央図書館 1973 425p
4. 『鍾路図書館六十年史』 ソウル ソウル特別市立鍾路図書館 1980 327p
5. 『南山図書館六十年史』 ソウル ソウル特別市立南山図書館 1982 251p
6. 金世翊『図書―印刷―図書館史』 ソウル 鍾路書籍 1982 264p

(雑誌論文)

1. 朴熙永「近世韓国図書館史抄」『図協月報』 ソウル 韓国図書館協会 4巻5号；1963.6 p.20～24
2. 朴熙永「韓国図書館略史」『国会図書館報』 ソウル 2巻2号；1965.2 p.5～11
3. 李鴻球「京城図書館略史」『図協月報』5巻4号；1964.5 p.2～7
4. 安春根「韓国図書館史箋註」『図書館』ソウル 国立中央図書館 30巻9号；1975.10 p.32～36
5. 金抱玉「日帝下の公共図書館に関する研究」『図書館学』ソウル 韓国図書館学会 第6輯；1979 p.137～163
6. 裴弘植「京城図書館設立に関する史的考察」『鍾路図書館図書館報』 ソウル 8号；1979 p.36～43
7. 權恩璟「開化期・日帝治下の公共図書館に関する研究 〔1〕～〔2〕」『図書館研究』ソウル 韓国図書館協会 22巻4～5号；1981.7/8～9/10
8. 藪秀道「韓国図書館概史」『ビブリア』41号；1969.3 p.70～75
9. 藤田豊「韓国図書館史の内の日本図書館史―日本図書館史の一面―」『図書館大道』4号；1975.12 p.1～5
10. 林昌夫「近代朝鮮公共図書館史における民族図書館の系譜―開化期から三・一運動頃まで―」『東京都立中央図書館研究紀要』13号；1981 p.97～135

(うじごう・つよし 経済社会課)